

令和元年5月22日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13277

研究課題名（和文）歴史資料保全活動の心理社会的影響に関する調査研究

研究課題名（英文）The studies about salvaging historical and cultural heritage as a form of psychosocial support

研究代表者

佐藤 大介（Sato, Daisuke）

東北大学・災害科学国際研究所・准教授

研究者番号：50374872

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：20世紀半ばから日本列島で頻発している自然災害で被災した、地域（民間社会）所在の歴史資料レスキューが復興に果たす役割について、歴史学者と臨床心理学者との協働により研究を実施した。本研究課題においては、東日本大震災での歴史資料レスキューで救済対象となった、被災した個人の所蔵者に対する聞き取り調査とその分析により、被災者の心理について類型化を行った。その結果、救済された歴史資料から先祖・地域の歴史を再確認して自尊心の回復につながった例、震災前からの歴史資料を通じた社会関係資本を被災を契機に活用して復興に取り組む例が確認できた。以上により、災害後のレジリエンスに歴史文化の果たす役割を解明できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

所蔵者も含めた多様な主体の参画により実施されてきた日本列島における歴史資料の救済、保全活動が、2005年に機関間常設委員会により提起された災害・紛争における心理社会的支援、および2016年に国連世界防災会議で採択された仙台防災枠組で提起されたマルチステークホルダーによるリスク対応の具体的な方法となり得る可能性を提起した。これについては2016年7月の国際心理学会、2018年12月のユネスコ「世界の遺産」主催フォーラムなどにおいて国内外の関係者から先進的な活動として評価された。

研究成果の概要（英文）：This Studies are about salvaging historical and cultural heritage as a form of psychosocial support, with the collaboration between historians and psychologists. Our team have found that in many cases, having qualified specialists salvage and restore people's heritage and history has helped them recover their identity and purpose in life, and to face up to the task of rebuilding their shattered communities. In one case, a person who lost several family members, all their worldly belongings, and their ties to her local community was able to recover the will to live, and rebuild ties to surviving family and the community, due to our salvage work. Saving historical heritage is an effective and valid form of psychosocial support (slide 20), as defined in the IASC Guidelines on Mental Health and Psychosocial Support in Emergency Settings (2007), and the Sphere Project (2011).

研究分野：日本近世史

キーワード：歴史資料の救済 心理社会的支援 レジリエンスの涵養 地域の再生

## 1. 研究開始当初の背景

日本列島の地域社会には、今なお膨大な歴史資料（古文書、古美術品、民具など）が残されている。災害時にそれらが一度に、広域に失われるという問題については、1995年の阪神・淡路大震災を契機に自覚され、その後は歴史研究者や文化財保護の関係者を中心に、2003年7月の地震を契機に活動を継続している宮城県など、列島各地の災害発生地で取り組まれている。それらを災害から守ると共に、被災地の社会的な復興に生かすための活動を「歴史資料保全活動」と称している。

これらの活動に取り組む地域では、支援を受けた史料所蔵者や、活動に参加した市民から積極的な評価が与えられている。単に過去の記録の救済を超え、過去の災害復興の事例を知った被災者が、自らが経験した地域にとどまって地域再建に取り組む動機を得た事例や、活動自体が所蔵者・地域住民と外部者を交えた新たな交流組織を生み出す事例が報告されている。このことは、被災者の心理的回復（レジリエンス）や、被災した地域社会において地域固有の歴史文化的蓄積を生かした新たな社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）の形成を示すと考えられる。しかし、これらは今のところ、歴史資料保全関係者の範囲内での活動報告や、報道などで断片的に事例紹介されるにとどまっている。災害からの地域や個人の回復過程全体において、歴史資料の救済・保全が重要な社会的機能を果たしえる可能性があるにもかかわらず、それを検証するための方法を確立するに至っていない。このことは、歴史資料の物理的な保全や内容分析を主とする歴史学の方法論のみでは分析し得ないのであり、新たな学際領域としての研究として確立することが求められている。

## 2. 研究の目的

以上を踏まえ、本研究では宮城県など東日本大震災被災地で歴史資料の救済保全活動を実践する歴史学者と、おなじく被災者の心理社会的支援を行っている心理学者の協働により、災害からの再建・復興の過程において、歴史資料の救済保全活動や、歴史資料に内包される情報を共有することの心理社会的支援としての意義について明らかにする。

具体的には、救済された史料の所蔵者や、地域の歴史を知った被災者にとって、諸活動が被災後の体験や心理状態に影響したか、その場合、影響はどのようなものであったかを、定性的・定量的に把握する。そのことにより、被災した個人の心理的回復過程や、歴史資料の救済保全活動を通じた社会関係資本のありようを解明する。これらは、臨床心理学の観点からは、世界保健機関（WHO）などが作成したガイドライン（IASC）で示された、地域の社会的資源を活用し被災者みずから困難を克服するという理念や、コミュニティ強化を、地域の歴史文化的ストックの活用により実践するための方法論を研究するということである。このような視角での研究は、日本国内はもとより国際的にも類例がなく、人文社会分野からの災害研究の領域を拡大することができる。

## 3. 研究の方法

本研究では、被災した歴史資料の所蔵者、地域住民を対象に研究を実施する。所蔵者に対しては、所蔵してきた歴史資料に対する救済支援を受けた所蔵者のうち、同意を得られた人々を対象に、所定の調査票に基づく訪問調査を実施する。地域住民に対しては、被災地において年間2回程度実施する講演会や、歴史資料の救済保全活動への参加者から任意でアンケート調査を行う。以上の調査で得られた情報を解析し、地域の歴史資料保全自体の社会的機能を明らかにすると共に、心理社会的な支援としての位置づけを、定量的な根拠に基づき明らかにする。

なお、本研究の実施に当たっては、東北大学災害科学国際研究所の倫理委員会の審査承認を得た（代表 人間社会対応研究部門 歴史資料保存研究分野 准教授 佐藤大介）。

## 4. 研究の成果

### (1) 調査方法

本調査では、内藤（1993）によって開発された個人別態度構造分析（Personal Attitude Construct P A C）を用いた。以下のような手続きに従って調査を実施した。

調査の目的等の説明の後、P A C分析の実施に先立ち、対象者には経験などを自由に語ってもらおう。次のセッションでは、調査者が用意した言葉や文（刺激語/文）が提示され、対象者はその場で頭に浮かんだことをカードに書き込み（自由連想）、記載カード間の距離を判断するなどの作業をしてもらう。統計ソフトを用いて、書き込み項目がいくつかの要因にまとめられ（クラスター）、 dendrogramと呼ばれるまとまりを示した図として、対象者に示す。その図を見ながら、対象者は傾聴する聞き手に支えられ、刺激語/文に対する自由連想を行う。対象者自身が自らの体験を振り返るというプロセスを踏まえるため、カウンセリング効果が期待できる方法である。さらにP A C分析はインタビューを実施する際に刺激語/文を設定するため、インタビューの構造が明確になる。構造化されない回想法によるフラッシュバックを回避することができるというメリットがある。

インタビュー時には、資料ネットワークの歴史学チームの担当者は同席しなかった。聞き取

りはすべて、臨床心理士の資格を有する者（心理チーム）で行った。毎回複数（2～3名）での心理士が役割分担（インタビュー、記録者）して聞き取りを行い、事後の記録を整理し、全員で確認した。

刺激文「震災後資料レスキューを経験して、どんな言葉、考え、イメージが浮かびますか？」

PAC分析実施の流れを下記の図に示した。インタビューは、3つのセッションで構成されている。

【第1セッション】 調査者の自己紹介と調査の趣旨と流れの説明を行い、協力の承諾を得る。この時点で辞退の申し出があった場合には、終了する。話題の主導権は対象者にあり、調査者は聞き手に徹する。対象者は、すでに資料レスキューに対して信頼や肯定的な気持ちを持っている可能性が高かったが、忌憚ない話を聞くために、聞き取りの調査者はレスキュー活動の枠外の者であり、対象者が望まない場合には内容をレスキュー担当者には伝えないことを約束した。

【第二セッション】 刺激語／文を提示し、「頭に浮かんだことを、何でもお書きください」という連想導入で開始する。対象者は、連想したことを、順次カードに記入して行く（記入順序）。記入された語／文はその場で直ちに提示ソフトPAC Assist2+で入力し、ランダムに提示されるカードペアに従って、調査者がペアを順次提示する。対象者は、ペア間の距離について、「非常に近い」から「非常に遠い」までの七段階のいずれに当たるかを判断するよう求められる。10の連想で、50回ほどのペア比較を行う。続いて、記入順序を重要度順序に並び替え、最後に各記入内容に対するイメージを、プラスイメージ（+）、マイナスイメージ（-）、どちらでもない（0）のいずれに当てはまるかを対象者に判断して、カードに書き入れてもらう。調査者は結果を、統計ソフトSPSSを使用し、クラスター距離測定としてウォード法を選択して解析した。解析の結果、項目のクラスターのまとまりを示すデンドログラム図が作成され、その場で直ちに結果を示して感想を得るか、持ち帰って後日、第三セッションとしてインタビューを行うかは、対象者の疲労度を見て判断した。

【第三セッション】 作成したデンドログラム図を対象者に示し、各クラスターの感想を聞き、タイトルを命名してもらう。デンドログラム図を見ての感想、項目のまとまりについての感想、クラスター全体の感想、調査を受けての感想、を聞き取った。最後に臨床心理士が全体の解釈とまとめを伝え、そのことに対する対象者の感想を聞いて終了した。

以上の3セッションを、2回から3回の訪問で実施した。調査のための訪問間隔は2～3週で、どの対象者でも概ね一時間で終了した。承諾を得た場合には、調査を録音した。記録内容は、複数の調査者で精査することで確認した。なお、聞き取り場所については、対象者の意向に合わせて設定した。

## (2) 調査結果

調査を完了した対象者の10人の感想を分類した結果を下表に示した。

対象者	1女性70代	2男性60代	3男性60代	4男性70代	5男性80代	対象者	6男性60代	7女性80代	8男性60代	9女性80代	10男性60代
被災状況	全壊	全壊	一部損壊	一部損壊	全壊	被災状況	一部損壊	全壊	全壊	全壊	半壊
家族死者数	2人	0	0	0	0	家族死者数	0	0	0	0	0
被災時居住	○	○	×	○	○	被災時居住	○	○	○	○	○
移住	○	×	×	×	○	移住	転居		転居		
表出数	9	10	10	8	12	表出総数	11	10	9	11	9
イメージ +	8	8	6	1	4	イメージ +	27%(3)	100%(10)	67%(6)	100%(11)	100%(9)
イメージ -	1	2	3	6	0	イメージ -	73%(8)	0	0	0	0
イメージ 0	0	0	0	1	8	イメージ 0	0	0	33%(3)	0	0
未来	○	○			○	未来			○	○	○
感謝	○(重要度1位)			○		感謝	○(重要度1位)	○	○	○(重要度1位)	
レスキュー	○	○			○(重要度1位)	レスキュー	○	○	○(重要度1位)	○	○
学び		○			○	学び			○	○	○
歴史	○	○(重要度1位)	○		○	歴史	○	○	○	○	○
誇り	○	○				誇り		○			
家族	○		○(重要度1位)		○	家族	○	○		○(重要度1位)	
ゴミ			○			ゴミ・片付け	○				
災害	○	○		○	○	災害					
行政				○(重要度1位)	○	行政	○(重要度1位)				
つらさ喪失感	○			○		つらさ喪失感	○				

史料レスキューに意義があったと回答した所有者のうち10人の回答内容を、以下のようにタイプ分けした。

図4 PAC分析実施の流れ

手順	対象者	調査者(ガイド担当、2記録担当)
初回		
①	刺激文を見て自由連想をカードに書く	導入と刺激文の提示。連想語の入力
②	カードを重要度順に並び替える	
③		重要度順をカードに書き入れ入力する
④	カード間の類似度距離を考え、示す	提示ソフトを用いてランダムに2枚ずつカードを提示し、示された結果を入力する
⑤	連想語への+、-、0のイメージを示す	示された結果を入力する
初回から2回目の間		
⑥		④の類似度距離を統計ソフトに入力し、デンドログラムを作成する～クラスター分析(ウォード法 SPSS使用)
2回目		
⑦	デンドログラムを見て、クラスターのまとまりごとに分割する	デンドログラムの提示と聞き取りの開始
⑧	クラスターのまとまりごとにさらに自由連想をする	自由連想の内容を記録する(記録と録音)
⑨	クラスターのまとまりごとに命名する	名称を記録する
⑩	クラスターのまとまりごとに2つずつ比較し、類似点、相違点を考える	クラスターの類似点、相違点を記録する
⑪		各項目についての質問をする
⑫	全体の感想を述べる	感想を記録する
2回目終了後		
⑬		考察を伝える

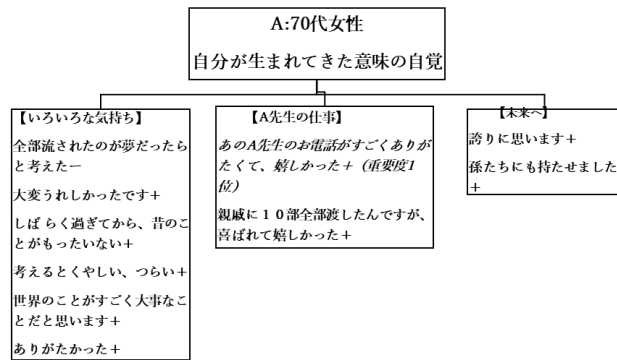
- タイプ1：私的及び公的な過去と未来を結ぶ存在として自己を認識する。
- タイプ2：先祖からの伝承を私的に「整理する」として認識する。
- タイプ3：公的機関に対する批判意識を持つ。

ポジティブ・ネガティブは、被害の度合とはパラレルではなかった。数は少なかったが、女性で家を継いでいたケースの方がポジティブな傾向を示した。行政に対して批判的だったケースは、過去5年間でがん等の重大疾患を発症していた。

続いて、以下にタイプ1と分類した対象者の内、2名のデンドログラムの結果のまとめを示す。

対象者A：70代前半の女性（調査時年齢）。この家の活動を示す古文書は、18世紀初頭に遡る。代々村役人を務め、海運業を展開させ、地域社会への貢献を行ってきた家系。家族が津波の犠牲者となり、家を失って転居していた。

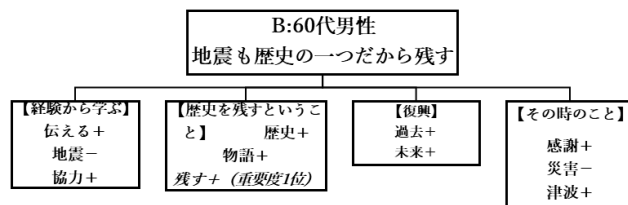
全体のタイトルを、「自分が生まれてきた意味の自覚」としている。震災後4年が経過していた第1回目の聞き取り調査の時にも、終始、強い悲嘆を示していた。しかし今回臨床心理士による傾聴を経験する過程で、改めてレスキューとの関りを振り返りながら、家族の歴史に対する誇りを持つようになった。自分の役割は、次世代に伝えることであるという自覚を持つようになったと述べている。3回の面接終了時には、悲嘆の感情を示さなくなった。



対象者B：調査当時は、60代後半の男性。家屋は敷地内の蔵を1棟残したのみで全壊。家族内の犠牲者はいなかった。

PAAC分析の結果について：「1、2、3の3つのグループは一つという感じ。4グループは歴史からは離れていてその時（東日本大震災）のこと。家や地域、震災の歴史があって、将来の復興へ。10年かかるだろうが、などです。このデンドログラムをみて、そう思いました。グループは、自分の考えを表し、よくまとまっていると思います。」

対象者Bは、1978年の宮城県沖地震にも、家族の安否が不明になるなどの過酷な体面をしている。その後、居住地区の災害の発生について丹念に調べ、その過程で地域と家族の歴史に興味を持つようになった。まさに、過去の災害での経験が予防接種のような働きをしており、今回の災害後も地域の復興に努力している事例である。しかし震災直後は、市から、残った土蔵が土地区画整備事業に支障を来すため、壊すか移築して欲しいと依頼されている。個人では移築が困難であったため、一時は土蔵の撤去も考えたが、資料ネットに連絡することで保存が可能になった。そうした経験を支えにして、地域の歴史保存に意欲を示し、その後自分の使命とした。対象者Bは、自宅全壊という過酷な経験にも関わらず、被災当日から津波襲来の記録を撮り続け、地域復興に尽力している。過去から学び、津波の被災状況を理解し知性化することで、激甚災害に打ちのめされることなく、復興にとどまらずその先の地域の発展を見据えている。類まれなレジリエンスを発揮している事例である。



### まとめ

本調査は、予想以上に、高齢者が壊滅的な被害を受けてもなお力強さを持ちうることを示す結果となった。資料所有者にとって、その力強さを支える一環となったのが資料レスキューであった。また、今回の臨床心理士による聞き取り調査の過程ではっきりと自覚する対象者がほとんどであった。臨床心理士による聞き取り調査で、レスキューに対する自分の気持ちが言語化される過程で、所有者の主体性と自尊感情が明確になって行く過程が示された。資料レスキューの活動と臨床心理士による聞き取り調査がセットになった時に、自らの語りを通して所有者が気持ちの整理をつけることが可能になった。

精神分析学者であったエリクソンは、乳児から高齢者までの発達段階を想定したライフ・サイクル論という生涯発達のモデルを示している。1959年に出版された著書 Psychological

issues identity and the life cycle (邦訳 自我同一性 アイデンティティとライフ・サイクル)の中で、高齢者の発達の到達点として ego integrity という表現が用いられており、「自我の完全性」と訳されている。「自分のライフ・サイクルを受け容れること」(前掲書 123 頁)「ただ一つのライフ・サイクルと、歴史の一節との偶然の一致であることを自覚している」ことでそれまでの経験を統合し残り少なくなった自分の人生を受け入れることが高齢者の発達課題であると述べている。今の日本で、60代を高齢者と呼ぶかということについては異論もあるだろうが、津波被害を受けた対象者は60年以上に亘り築いてきた人生の基盤を失うことになった。しかし、文書に残された家族の記憶がレスキューによって再生されたことで、一旦は危機的状況に陥った自らのライフ・サイクルを受け入れ、未来に渡す意義を自覚するようになった。今回の調査で、資料レスキュー活動と資料所有者の思いを聞き取るという活動がセットになった場合、大きな効果を持つことが示された。こうした支援活動を、今後も心理社会的支援のモデルケースとして提起して行きたい。

21世紀に入り多発している自然災害は、途上国のみならず世界中の地域、社会に広範囲に襲いかかり、大きな被害を多数の人々の生活に及ぼすようになった。こうした状況において、生命の安全と物理的な安心が確保されることは第一の課題になる。時間経過に伴い次に課題となるのは、大震災そのものも含めた人々の記憶と記録を後世に伝えることである。調査に携わりながら、まさに歴史的な現場に立っているのだということを対象者の方たちから教えていただき、今回の研究の意義への思いを強くした。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 8 件)

Sato Daisuke, *Salvaging Historical Documents and Rebuilding Communities : Lessons from after the Great East Japan Earthquake of 2011*, 査読無(招待), UNESCO Global Policy Forum on Preservation of Documentary Heritage for Disaster Risk Reduction and Management, 2018年12月11日

佐藤大介, 東日本大震災後の自然災害被災地への支援 個人的経験から, 査読無(招待), 第5回全国史料ネット研究交流集会, 2018年11月18日

佐藤大介, 『ふるさとの歴史』を救う意味 心理社会的支援としての歴史資料保全の可能性, 査読無(招待), 日本学術会議第一部夏季部会 公開シンポジウム「東日本大震災から10年を見据えて」, 2018年7月29日

Kamiyama Machiko, Sato Masae, Sato Daisuke, Morris John, Ichijo Reika, Nakatani Kyoko, *Cooperation between Historians and Psychologists in Assessing Psychosocial Support in Disaster Areas*, 査読有, The 18th edition of the European Association of Developmental Psycholog, 2017年9月1日

佐藤大介, 『歴史資料保全』の先へ 3.11から5年目の取り組み, 査読無, 第3回史料ネット全国集会, 2016年12月13日

佐藤大介, 宮城での歴史資料保全活動、「その先」へ向けて, 査読無(招待), 地域歴史文化大学フォーラム, 2016年11月12日

Sato Daisuke, *Building Resilience and Social Capital in Disaster-affected Communities ; Salvaging Historical and Cultural Heritage as a Form of Psychosocial Support*, 査読有, 第31回国際心理学会 2016年7月26日

J.F.Morris, Sato Daisuke, Kamiyama Machiko, Sato Masae, *Crossing Boundaries; A Case Study of Cooperation between Historians and Psychologists in Providing and Assessing Community Psychosocial support*, 査読有, 第31回国際心理学会 2016年7月25日

〔図書〕(計 2 件)

上山真知子, 震災後のメンタルヘルスと支援, 白井利明編著「生涯発達の理論と支援」第9章金子書房, 2019年9月出版予定, 掲載頁未定

上山真知子, 資料レスキューと心理社会的支援, 荒武賢一郎、高橋陽一編「古文書がつなぐ人と地域 これからの歴史資料保全活動」第4章, 東北大学出版会, 2019年9月出版予定, 掲載頁未定

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等 なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：Morris John.F  
ローマ字氏名：Morris John  
所属研究機関名：宮城学院女子大学  
部局名：学芸学部  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：30220057

研究分担者氏名：上山 眞知子  
ローマ字氏名：Kamiyama Machiko  
所属研究機関名：山形大学  
部局名：地域教育文化学部  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：80344779

研究分担者氏名：佐藤 正恵  
ローマ字氏名：Sato Masae  
所属研究機関名：石巻専修大学  
部局名：人間学部  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：00211946

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：高橋 美貴  
ローマ字氏名：Takahashi Yoshitaka

研究協力者氏名：高橋 陽一  
ローマ字氏名：Takahashi Yoichi

研究協力者氏名：斎藤 善之  
ローマ字氏名：Saito Yoshiyuki